

水圏の中の北欧

歴史と地理を切り離して考えることはできない。北欧前近代の歴史をよりよく知るために、この地域が置かれた自然地理環境を認識しておく必要がある。仮にスカンディナヴィア半島とユトランド[ユラン]半島を北欧世界の枢軸線とするならば、西は北海、北は北極海、東はバルト海と三方を海に囲まれ、内陸部もまた河川と湖沼を通じて海へつながる。穀物生産が可能な平野部すらもこの水圏ネットワークの中にある。そしてネットワークをつなぐ唯一の交通手段は船であった。

●ヴァイキングからキリスト教国家へ：9世紀から11世紀まで 海域を越えた北欧と周辺世界との交流は、8世紀末より加速度的に高まった。ブリテンではマーシア王国のオッファが権勢を振るい、大陸ではカロリング朝が遠征を繰り返し、ユーラシア西部ではアッバース朝が版図を拡大していた時期に相当する。その背景には北ヨーロッパに対するイスラーム銀の流入による経済活動の活性化と交易ネットワークの組織化を見て取ることができる。ヨーロッパ半島とイスラーム圏の間に位置していた北欧もまた、このような経済変動の影響を大きく受けた。とりわけ海上交通の要衝となる都市的集落を支配する在地有力者が、市場などの管理を通じて富を蓄積した。デンマークのヒーゼビュー、スウェーデンのビルカ、ノルウェーのスキリングサルなどがその代表的な事例である。

ヴァイキングの拡大はこのような背景のもと開始された。9世紀半ばから11世紀半ばにかけて、ヴァイキング船を操舵するスカンディナヴィア人は、西はアメリカ大陸、東は黒海周縁部に至るまで拡大した。彼らは各地にコミュニティを敷設し、北大西洋から黒海を結びつけるネットワークを構築して、スカンディナヴィア影響圏を紀元1000年前後の北方世界に現出させた。このネットワークに乗ってヒト・モノ・カネ・情報などが往来する中、10世紀半ばより、まず、先進的大陸世界と接していたデンマークで、イエリングを拠点とした有力者家系が王を名乗り国家形成を開始した。キリスト教を組み込んだ新興国家はクヌート王の時代に北ヨーロッパ全域に統治権力を及ぼす強大な存在となった。若干遅れてノルウェーとスウェーデンでも王権による国家形成が進んだ。

●北欧3王国の拡大：12世紀から15世紀まで キリスト教国となったデンマーク・ノルウェー・スウェーデンの3王国は、ラテン・カトリック世界を構成する国家として、ローマ教皇に宗教的権威を認める中世ヨーロッパの国際政治の中に組み込まれた。1104年、デンマークのルンドに北欧全体を統括する大司教座が、12世紀の半ばにはノルウェーのニダロス(トロンハイム)とスウェーデンのウップサラにも設置された。国王と大司教が聖俗両面を統治し、北欧三国での勢力

均衡を図る中世的体制がここに成立した。

ヨーロッパ諸国にならい法制度と行政機構の整備を進める3国は、12世紀半ば以降、海外領土の拡大を図った。バルト海沿岸部の異教徒をキリスト教化させるという名目で進められた北方十字軍は、結果として、13世紀前半までにバルト海南岸部とエストニアをデンマーク領に、フィンランドをスウェーデン領に組み込んだ。他方ノルウェーは、現地コミュニティの成立当初から関係の深い、アイスランドをはじめとする北大西洋の島嶼部を版図の一部とした。つまり13世紀半ばまでに3王国はいずれも、王権が巡幸し直接統治を行う王国中核部のほかに、船舶の往来を通じて役人を派遣し現地を統括する海外領土を手にした。

13世紀から14世紀にかけて、この海外支配体制を構築した北欧三国は、都市連合ハンザの台頭により、より複雑な国際政治の中に置かれた。デンマークは関税などを巡ってハンザと対立する一方、ノルウェーとスウェーデン、とりわけその都市部は、ハンザの提供する穀物などのリソースなしでは安定的な経済状態を保つことが困難となっていた。ハンザが支配する交易ネットワークは、神聖ローマ帝国だけではなく、スコットランド、イングランド、フランドル、ポーランド、ドイツ騎士修道会、リトアニア、ノヴゴロドといった北海・バルト海沿岸の政治体と北欧三国との関係をより複雑なものとした。

●連合体制から近世国家体制：15世紀から17世紀まで 14世紀半ばにイタリアから侵入した黒死病は、都市人口の減少や農村部での廃村化を通じて北欧にも大きな打撃を与えた。北欧三国は、漸次海外領土への関心を薄めてゆくとともに、中央集権化や国家連合が進展するヨーロッパ国際政治への対応を模索した。そしてノルウェーとスウェーデンにおける王家の後継者不在の結果、デンマークのマルグレーテを盟主に仰ぎ締結されたのが、1397年のカルマル連合である。

同君連合であるカルマル連合のもとでは、3国の法的独立は堅持されていたものの、デンマーク王権の拠点コペンハーゲンにヒト・モノ・カネ・情報などが徐々に集中するようになった。とりわけスウェーデン貴族はデンマーク王家の優勢的状況に違和感をもち、連合からの離脱をたびたび画策した。最終的に、1523年、スウェーデン王となったグスタフ・ヴァーサが連合から離脱し、北欧はデンマーク＝ノルウェー連合王国とスウェーデン王国に二分された。ドイツのヴィッテンベルクを起点とした反カトリック宗教運動は、北欧にも浸透した。グスタフ・ヴァーサとデンマーク王クリスチヤン3世は、両国にプロテスタント受容の基盤をつくり、貴族層の統制と海外諸国との関係を確立することで、近世国家の礎となった。海外植民地を獲得し北方の雄として認識される17世紀の両国の繁栄は、中世後期からの長い道程の到達点でもあった。

[小澤 実]

□参考文献

- [1] 小澤 実・薩摩秀登・林 邦夫 2009『辺境のダイナミズム』岩波書店。